

生活の安心感・満足感の心理的要素の検討

—山形県酒田市における住民意識調査より—

益子 行弘

1. はじめに

2010年3月、かねてから鳩山由紀夫首相により示されていた、国民の「幸福度」調査の結果が発表された（内閣府経済社会システム,2010）。これによると、「どの程度幸福か？」との問いに、10段階評価で、日本人の平均値は6.5であり、日本人の幸福度は、中庸よりは高かったものの、同様の調査を行ったデンマークや英国と比較して低い点数をつける者が多かったという。また、幸福感に影響を与える要素として、「健康」、「家族関係」「家計状況」があり、雇用や住居の安定、福祉・子育て、年金など、生活にかかる事柄の満足感・安心感が幸福度の評価に影響していると報告された。

日本の幸福度調査報告の前年、2009年9月に、フランスのニコラ・サルコジ大統領が、従来の国内総生産（GDP）に加え、医療福祉の充実度、不平等感、雇用条件・雇用不安、家族関係の充実度などを含めた、社会・経済発展を測定する指標としての「幸福度」を導入する予定があることを発表した。サルコジ大統領の提案の背景には、2008年2月から行われていた「新経済発展指標プロジェクト」があるといわれている。「新経済発展指標プロジェクト」は、サルコジ大統領が、ノーベル経済学賞を受賞した経済学者であるStiglitz,J.らに、GDPに代わる新たな経済指標の考案を依頼し、発足した。Stiglitzらは、生活の質は、GDPなどの経済中心の指標ではなく、人間中心の指標を用いるべきだと主張している。その項目例として、生活満足度や幸福感、生活の安心・安全感を挙げており、日常生活における満足度や、「幸福」と感じる頻度や程度、生活を営む上での安心・安全感の程度が生活の質には重要な要素であることを指摘している。

GDPやGNP（国民総生産）などの伝統的な経済活動の指標は、人間が感じる幸福の多くの側面とは乖離し、人間の生活の質（生活の豊かさ）を評価できていないとの批判は以前からあった（Inglehart,R., Basanez,M., Moreno,A., 1998）。最近になって日本やフランスが幸福度調査を行った背景には、現在の世界金融危機や金融市場崩壊により、経済成長の目標である国民の幸せや豊かさをより直接的に測ることを通じて社会的課題の解決を目指そうとする、世界的な動きがある（前田、2010）。

もっとも、経済的な指標より、人間の生活の質を重視した指標を導入しようといった動きは以前からあった。

ヒマラヤの小国、ブータンにおいては、GNPに対する概念としてGNH（Gross National Happiness, 国民総幸福量）を1976年に提唱していた。GNHは、金銭的・物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさを目指すべきとする考えから生まれたものとされる。国民総幸福量には、「持続可能で公平な社会経済開発」、「自然環境の保護」、「ブータンの有形・無形文化財の保護」、「住民の意思を尊重した統治」の4つの主要な柱があり、経済開発による偏った発展により、自然環境が破壊されたり、ブータンの伝統文化が失われないようにするのが、GNHの精神であるといわれる。この精神は政策にも反映されており、政府からは、国民の医療費や教育費等、国民の文化的な生活に必要な費用は全額国の負担としたり、森林開発にも厳しい制限を設け、国土の60%以上の森林もしくは未開発の面積を維持していく方針が打ち出されている。また、地方分権化を進め、地域住民の意向が尊重されやすいような仕組みを積極的に取り入れている。ブータンでは、「基本的な生活」、「文化の多様化」、「感情の豊かさ」、「健康」、「教育」、「時間の使い方」、「自然環境」、「コミュニティの活力」、「良い統治」の9つの要素をGNHの尺度として用いている。2007年に国が行った調査では、これら9要素について57の副次的な質問項目を設定し、「国民の幸福」を定量的に測定している。

幸福感を定量的に測定しようとする試みは、日本においては70年代から、社会学や心理学を中心に様々な分野で検討がなされてきた。白石・白石（2006）は、生活における幸福（Well-being）の定義付けを行った上で、それを表す客観的・主観的指標を説明し、「幸福度」を示す尺度を挙げている。これによると、「生

活における幸福」には、「外的な性質（周囲の環境に存在）」と「内的な性質（個人の内部に存在）」、「良い生活のチャンス（life chances）」と「生活の実際の結果（life results）」の側面があるとし、幸福感の要素として、個人の内的な要素、外的な（環境的）要素、生活という3つのより具体的な側面を示している。単に「あなたの幸福度はどの程度ですか？」とたずねても、回答者によって基準や視点が違い、尺度としては不適切であると指摘する。さらに白石・白石は、『『生活の満足度』をたずねるアンケート』が、現代の幸福度を測定する尺度として適するとしている。生活の主観的な評価だけでなく、周囲の状況や自分の過去の経験と比較した、相対的・客観的な評価となってしまう可能性はある。しかし、人々の認識は自分自身が生活している社会状況を反映しているものであり、それゆえに幸福感と社会状況との関連をみるには、住民の日常生活の満足感の認識を分析すべきであり、比較的イメージしやすい、具体的な尺度である「生活の満足度」が適するとの主張である。

また、生活満足度の規定要素として、Frey and Stutzer (2002) は、生活幸福感は、生活の安心感・満足感によるところが大きいと結論付けている。人は「安心安全な生活観」をもっているとされる。「安心安全な生活観」は、日常生活の、安心感－不安感、満足感－不満感により構成され、その両方が高いほど幸福度が高まるとされ、どちらか一方でもネガティブな方向にいくと、幸福度は低くなるとの主張である。

これら先行研究から、生活満足度の要素には、自然環境や福祉、生活の安全性や利便性、地域における人間関係など様々あるが、心理的にどのような構成要素があるのかは検討されてこなかった。

そこで本研究では、生活や地域の満足度、生活環境の安全度、地域環境といった、生活の安心感や満足感を問う質問項目を用いて住民意識調査を行い、年代や居住期間といった、属性による意識の違いについて検討し、さらに、これら質問項目の複数の側面から、生活の安心感や満足感の構造を同定、心理的な構成要素を検討する。

2. 目的

本研究は、年代や居住期間といった、属性による生活満足度の違いについて検討し、さらに、これら質問項目の複数の側面から、生活の安心感・満足感の心理的な構成要素を検討することを目的とする。

3. 方法

3.1. 酒田市の概要

酒田市は山形県の北西部、庄内平野の北部に位置し、日本海に注ぐ最上川・庄内平野による、国内有数の穀倉地帯を有している。2005年11月に、それまでの酒田市、八幡町、松山町、平田町が合併し、面積は602.79㎡、人口は県内第3位となった。酒田市の歴史は古く、1521年頃、奥州藤原氏の家臣が砂浜を開拓し作ったと言われている。江戸時代から明治にかけては、米や紅花、大豆などの集積港として栄えた。

酒田市の人口は、1970年代以降、徐々に減少している。とくに最近20年間では、1990年12万2850人、1995年12万2536人、2005年11万7577人、2010年9月30日現在で11万2587人と、約8.3%減少している。一方、産業構成を見ると、1990年以降、第一次産業と第二次産業が減少し、第三次産業は一貫して増加している。国勢調査データによれば、第一次産業は1990年に13.8%であったのが、1995年に10.8%、2005年には9.9%に減少しており、とくに林業と漁業は著しく、1990年に比べ、総数も半減している。第二次産業は1990年に33.5%であったのが、1995年に33.1%、2005年には27.2%にまで減少している。とくに鉱業と製造業が著しく、総数で鉱業が約70%、製造業が約40%減少している。第三次産業は、1990年に52.7%であったのが、1995年に56.0%、2005年には62.9%に増加している。しかし、総数で増加しているのはサービス業・卸売・小売・飲食のみで、それ以外の、運輸・通信・電気・ガス・熱供給・水道業、金融・保険・不動産業は減少を続けている。

3.2. 調査の概要

調査は2010年6月から7月にかけて、面接調査法により実施した。調査対象者として、2010年4月1日現在、酒田市に在住する満20歳以上の男女のうち、420名を抽出した。抽出方法は層化二段階無作為抽出法を用いた。警察管区分と居住人数規模に応じて酒田市を3地域に分類、居住者の人数規模からみて酒田市を代表することができるように各10地点を選定し、住民基本台帳から等間隔抽出法および現地抽出にて行った。内訳は、20代から70代の各年代60名(男女各30名)であった(表1および表2)。

表1 調査協力者属性(性別)

	人数	%
男性	180	50.0
女性	180	50.0
計	360	100.0

表2 調査協力者属性(年代)

	人数	%
20代	60	16.7
30代	60	16.7
40代	60	16.7
50代	60	16.7
60代	60	16.7
70代	60	16.7

調査は自記式質問紙法とした。調査協力者には直接質問紙を配布し、後日回収する方式とした。質問紙のフェイスシートには、性別、年齢、世帯構成、居住期間、職業、職業分野の記入欄を用意した。

調査内容は、生活の安心感・満足感に関する質問とした。まず、Frey and Stutzer (2002)、渡邊 (2006)、白石・白石 (2006)、國光 (2010)、山形県 (2010)を参考に、主軸となる質問項目として、「愛着度」、「住みやすさ」、「地域における人間関係の良好度」、「生活満足度」、「地域行政への満足度」、「生活環境の

安全度」、「生活における幸福度」の質問項目を設定した。さらに、市川（2008）、所沢市（2010）、柏市（2010）、幸田町（2010）を参考にして、主軸7項目に関する副次的な質問31項目を追加し、全38項目とした。回答は、両極性の5段階評定尺度とした。たとえば、「あなたは、あなたの街に愛着をもっていますか？」の質問であれば、回答は、「愛着がある」、「やや愛着がある」、「どちらでもない」、「あまり愛着がない」、「愛着がない」といった言葉の中から1つを選択してもらう。また、すべての質問項目において評定の理由を記入してもらうための自由回答欄を用意した。分析には、SPSS11.0JおよびR-2.11.1を用いた。

4. 結果と考察

4.1. 属性の概要

まず、調査協力者の職業を見ると、無職が25.0%と最も多く、次いで常勤雇用者（23.6%）、臨時雇用者（16.0%）の順に多かった（表3）。さらに、調査協力者の職業分野を見てみると、無職が25.0%と最も多く、次いで販売的職業（21.4%）、事務的職業（19.5%）の順に多かった（表4）。

表3 調査協力者の職業

	人数	%
事務的職業	72	20.0
販売的職業	86	23.9
熟練・労務的職業	33	9.2
専門的職業	32	8.9
管理的職業	8	2.2
農林水産業	25	6.9
その他	17	4.7
無職	87	24.2

表4 調査協力者の職業分野

	人数	%
自営業	32	8.9
会社経営者、役員	5	1.4
常用雇用者	85	23.6
臨時雇用者 (パート、アルバイト)	60	16.7
公務員	23	6.4
専業主婦（主夫）	52	14.4
無職	87	24.2
学生	9	2.5
その他	7	1.9
計	360	100.0

世帯構成をみると、2世代同居の世帯が38.9%で最も多く、次いで1世代の世帯、3世代同居の世帯が23.6%、単身者は10.6%であった（表5）。平成17年国勢調査による全国平均では、単身者が29.5%、1世代世帯は19.6%、2世代世帯は29.9%であったことから、今回の調査協力者は、全国平均に比べ、2世代世帯が多く、単身者が少なかったといえる。

年代別の世帯構成では、50代の2世代世帯が53.3%と最も多く、次いで40代の2世代世帯の43.3%、70代の3世代世帯の40.0%の順に多かった。一般に、50代以上になると、子供が独立し、夫婦のみの世帯が増える傾向にあるが、今回は、子あるいは親と同居している50代の世帯が多かった（表6）。

表5 調査協力者の世帯構成

	人数	%
単身	38	10.6
1世代（夫婦のみ）	85	23.6
2世代（夫婦と子供）	140	38.9
3世代	85	23.6
その他	12	3.3

表6 年代 × 世帯構成

[人数(%)]

	単身	1世代 (夫婦のみ)	2世代 (夫婦と子供)	3世代	その他	計
20代	14 (23.3)	10 (16.7)	17 (28.3)	13 (21.7)	6 (10.0)	60 (100.0)
30代	7 (11.7)	12 (20.0)	25 (41.7)	16 (26.7)	0 (0.0)	60 (100.0)
40代	3 (5.0)	22 (36.7)	26 (43.3)	9 (15.0)	0 (0.0)	60 (100.0)
50代	0 (0.0)	20 (33.3)	32 (53.3)	8 (13.3)	0 (0.0)	60 (100.0)
60代	6 (10.0)	14 (23.3)	23 (38.3)	15 (25.0)	2 (3.3)	60 (100.0)
70代	8 (13.3)	7 (11.7)	17 (28.3)	24 (40.0)	4 (6.7)	60 (100.0)

居住期間を見ると、酒田市に住んで10年未満という協力者が全体の約3分の1、31.4%に上った（表7）。

年代別の居住期間を見ると、70代の「30年以上」が50.0%で最も多く、次いで60代の「30年以上」が36.7%、30代の「5年未満」が35.0%となっている（表8）。70代以上については、これまでの半分以上を酒田市で過ごしている。また、20年以上酒田市に住んでいるという協力者は81.7%、60代以上についても、20年以上酒田市に住んでいるという協力者は60.0%と、比較的多かったといえる。一方で、30代は酒田市に住んで10年未満の協力者が56.7%、20代でも46.7%と、若年者は酒田市の居住期間が短いことがわかる。

表7 調査協力者の居住期間

	人数	%
5年未満	57	15.8
5年以上10年未満	56	15.6
10年以上20年未満	73	20.3
20年以上30年未満	91	25.3
30年以上	83	23.1

表8 年代 × 居住期間

[人数(%)]

	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	計
20代	16 (26.7)	12 (20.0)	14 (23.3)	18 (30.0)	0 (0.0)	60 (100.0)
30代	21 (35.0)	13 (21.7)	8 (13.3)	10 (16.7)	8 (13.3)	60 (100.0)
40代	10 (16.7)	16 (26.7)	15 (25.0)	14 (23.3)	5 (8.3)	60 (100.0)
50代	8 (13.3)	6 (10.0)	12 (20.0)	16 (26.7)	18 (30.0)	60 (100.0)
60代	2 (3.3)	6 (10.0)	16 (26.7)	14 (23.3)	22 (36.7)	60 (100.0)
70代	0 (0.0)	3 (5.0)	8 (13.3)	19 (31.7)	30 (50.0)	60 (100.0)

4.2. 属性による比較

質問項目のうち、主軸として用意した7項目について、年代と居住期間の属性間比較を行った。

4.2.1. 愛着度

愛着度に関する質問項目「あなたは、あなたの街に愛着をもっていますか？」について、評定平均値の算出を行い、年代と居住期間を要因とする、2要因の分散分析およびBonferroniの多重比較検定を行った（表9、表10）。

その結果、評定平均値は、年代では70代が4.49と最も高く、最も低かったのは20代の3.80で、年代が上がるほど評定も高くなる傾向がみられた。居住期間についても、30年以上が4.46で最も高く、5年未満が3.80と最も低くなり、居住期間が長いほど評価が高くなる傾向がみられた。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代の主効果で有意傾向（ $F(5,330)=2.12, p<.10$ ）、居住期間の主効果で有意な差がみられた（ $F(4,330)=3.66, p<.01$ ）。多重比較の結果、20代と60代および70代の間等、5年未満と20年以上30年未満、30年以上の間などで差異がみられた。

全年代の評定平均値が、中庸値である3.0以上であった。最も低かった20代でも3.80と、全年代で酒田市に対する愛着度は高かった。年代が上がるにつれて愛着度は高くなっているが、検定の結果、年代の主効果に有意傾向がみられ、多重比較の結果、20代と60代間、20代と70代間で有意な差がみられたこと

から、若年者より60代以上の高齢者のほうが、より酒田市に愛着を持っていることがわかった。居住期間については、年代と同様に全居住期間の評定平均値が、中庸値である3.0以上であった。最も低かった居住期間5年未満でも3.80であり、居住期間を問わず、酒田市に対する愛着度は高かったといえる。居住期間が長くなるほど愛着度は高くなっているが、検定の結果、居住期間の主効果に1%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間5年未満と20年以上30年未満間、5年未満と30年以上間において、有意な差がみられたことから、長く住めば住むほど、酒田市に対する愛着度が高いということがいえよう。

表9 「愛着度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	3.56	3.67	3.86	4.11	0.00	3.80
30代	3.86	4.08	4.00	4.30	4.38	4.12
40代	4.10	4.31	4.20	4.29	4.00	4.18
50代	4.00	4.17	4.25	4.19	4.44	4.21
60代	3.50	4.33	4.56	4.71	4.59	4.34
70代	0.00	4.33	4.00	4.74	4.90	4.49
平均	3.80	4.15	4.14	4.39	4.46	

表10 「愛着度」分散分析表（年代 × 居住期間）

愛着度	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	17.92	5	3.58	2.12 †
居住期間	24.72	4	6.18	3.66 **
年代×居住期間	22.13	20	1.10	0.66
誤差	557.21	330	1.68	

† $p < .10$

* $p < .05$

** $p < .01$

4.2.2. 住みやすさ

住みやすさに関する質問項目「あなたは、あなたの街の住みやすいと感じますか？」について、愛着度と同様、評定平均値の算出を行い、年代と居住期間を要因とする、2要因の分散分析およびBonferroniの多重比較検定を行った（表

11、表12)。評定平均値は、年代では、70代が4.32と最も高く、最も低かったのは20代の3.43で、愛着度と同様、年代が上がるほど評定も高かった。居住期間は、20年以上30年未満が3.94と最も高く、5年未満が3.50と最も低かった。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた（ $F(5,330)=3.19, p<.01, F(4,330)=2.94, p<.05$ ）。多重比較の結果、20代と60代および70代の間、5年未満とそれ以外の期間間で差異がみられた。

表11 「住みやすさ」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

住みやすさ	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	2.63	3.50	3.93	3.67	0.00	3.43
30代	4.10	3.54	3.50	3.80	3.38	3.66
40代	3.40	3.75	3.53	3.93	3.60	3.64
50代	3.38	4.17	3.58	3.63	3.94	3.74
60代	4.00	4.00	4.13	4.21	4.32	4.13
70代	0.00	4.33	4.25	4.42	4.27	4.32
平均	3.50	3.88	3.82	3.94	3.90	

表12 「住みやすさ」の分散分析表（年代 × 居住期間）

住みやすさ	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	23.05	5	4.61	3.19**
居住期間	17.01	4	4.25	2.94*
年代×居住期間	11.35	20	0.57	0.39
誤差	477.59	330	1.45	

† $p<.10$

* $p<.05$

** $p<.01$

住みやすさに関する質問項目においては、全年代の評定平均値が、中庸値である3.0以上であった。最も低かった20代でも3.43と、全年代で酒田市に対する住みやすさの評価は高かった。愛着度と同様に、年代が上がるにつれて住みやすさの評価は高くなっており、検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみられた。多重比較の結果、20代と60代間、20代と70代間で有意な差がみられた。

ことから、若年者より60代以上の高齢者のほうが、より酒田市は住みやすい街であると感じていることがわかった。居住期間については、年代と同様に全居住期間の評定平均値が、中庸値である3.0以上であった。最も低かった居住期間5年未満でも3.50であり、居住期間を問わず、酒田市に対して住みやすいと感じているといえる。しかし、最も高い20年以上30年未満においても3.94という評定平均値であり、これは評定値4.0の「やや住みやすい」という評価をわずかに下回るといった評価であった。検定の結果、居住期間の主効果に5%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間5年未満とそれ以外の期間間で有意な差がみられたことから、居住期間が5年以上になると、住みやすさをより感じるようになるといえる。ただし、愛着度のように、居住期間が長くなるほど高くなるというわけではない。これらのことから、住みやすさは、5年以上住むと評価はやや上がるが、以降は大きな変化はしないといえる。

4.2.3. 生活満足度

生活満足度に関する質問項目「あなたは、今の生活に満足していますか？」については、評定平均値は、年代では、50代が4.34と最も高く、次いで70代(3.97)、40代(3.88)と続き、最も低かったのは20代の3.27であった(表13)。居住期間では、5年以上10年未満と、10年以上20年未満が3.92と最も高く、5年未満の3.51が最も低かったが、5年未満以外は評定が拮抗していた。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた($F(5,330)=3.15, p<.01$ 、 $F(4,330)=3.47, p<.01$)。多重比較の結果、年代間では、20代と50代および70代の間、30代と50代および70代の間で差があった。居住期間では、5年未満とそれ以外の期間間で差異がみられた(表14)。

生活満足度に関する質問項目においては、全年代の評定平均値が、中庸値である3.0以上であり、全体的に生活の満足感が高いといえる。しかしながら、最も評定平均値の低い20代が3.27、最も高い50代が4.34と差も大きく、また、年代によって評価にばらつきがあった。検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみられた。多重比較の結果、20代と50代間、20代と70代間、30代と50代間、30代と70代間で有意な差がみられた。これらのことから、20代30代といった若

年者より50代や70代の高齢者のほうが、より生活に満足感があると感じていることがわかった。居住期間については、年代と同様に、全居住期間の評定平均値が、中庸値である3.0以上であった。最も低かった居住期間5年未満でも3.51であり、居住期間を問わず、生活に満足感があると感じているといえる。しかし、最も評定平均値が高い5年以上10年未満、10年以上20年未満においても3.92という評定平均値であり、これは評定値4.0の「やや満足している」という評価をわずかに下回るといった評価であった。検定の結果、居住期間の主効果に5%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間5年未満とそれ以外の期間間で有意な差がみられたことから、居住期間が5年以上になると、生活の満足感をより感じるようになるといえる。ただし、住みやすさと同様に、居住期間が長くなるほど生活の満足度は高くなるというわけではないといえる。

表13 「生活満足度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

生活満足度	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	3.00	3.17	3.79	3.11	0.00	3.27
30代	3.57	3.69	3.63	3.70	3.63	3.64
40代	3.00	4.00	3.87	4.14	4.40	3.88
50代	4.50	4.67	4.42	4.25	3.89	4.34
60代	3.50	4.00	3.81	4.14	3.82	3.85
70代	0.00	4.00	4.00	4.05	3.83	3.97
平均	3.51	3.92	3.92	3.90	3.91	

表14 「生活満足度」の分散分析表（年代 × 居住期間）

生活満足度	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	19.79	5	3.96	3.15**
居住期間	17.41	4	4.35	3.47**
年代×居住期間	9.83	20	0.49	0.39
誤差	414.33	330	1.26	

† $p < .10$

* $p < .05$

** $p < .01$

4.2.4. 地域行政の満足度

地域行政の満足度に関する質問項目「市政や町政などの地域行政に満足していますか？」については、評定平均値は、年代では、70代が3.10と最も高く、最も低かったのは30代の2.39であった（表15）。居住期間では、30年以上が2.98と最も高かったものの、最も低かった5年以上10年未満の2.80であり、拮抗していた。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた（ $F(5,330)=3.55, p<.01$ 、 $F(4,330)=3.29, p<.05$ ）。多重比較の結果、年代では、30代と、70代、60代、40代の間、20代と、40代、60代、70代の間で差異があることがわかった。居住期間では、30年以上とそれ以外の期間間で差異がみられた（表16）。

表15 「地域行政満足度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

行政満足度	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	2.38	3.00	2.71	2.61	0.00	2.68
30代	2.71	2.31	2.50	2.30	2.13	2.39
40代	2.90	3.00	3.07	3.07	3.00	3.01
50代	3.13	2.67	2.75	2.94	3.11	2.92
60代	3.00	3.17	3.00	3.14	3.05	3.07
70代	0.00	2.67	3.00	3.11	3.63	3.10
平均	2.82	2.80	2.84	2.86	2.98	

表16 「地域行政満足度」の分散分析表（年代 × 居住期間）

行政満足度	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	15.87	5	3.17	3.55**
居住期間	11.78	4	2.94	3.29*
年代×居住期間	8.08	20	0.40	0.45
誤差	295.41	330	0.90	

† $p<.10$

* $p<.05$

** $p<.01$

地域行政の満足度に関する質問項目においては、年代でみると、最も評定平均値が高い70代で3.10、最も低い30代で2.39と、中庸値3.0前後であった。すなわち、「どちらでもない」といった評価に近い。検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみられた。多重比較の結果、30代と40代間、30代と60代間、30代と70代間、20代と40代間、20代と60代間、20代と70代間で有意な差がみられた。これらのことから、20代30代といった若年者より60代や70代の高年齢者のほうが、より地域行政に対して満足感があることがわかった。居住期間については、全居住期間において、評定平均値は3.0をわずかに下回っていた。検定の結果、居住期間の主効果に5%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間30年以上とそれ以外の期間間で有意な差がみられたことから、居住期間が30年以上になると、地域行政に対する満足感が高くなるといえる。しかし、評定平均値の差はわずかであり、地域行政に対する満足感は、居住期間が長くても短くても、全体的にはあまり大きな変化はないということがわかる。

4.2.5. 地域における人間関係の良好度

地域における人間関係の良好度に関する質問項目「お住まいの地域での人間関係は良好ですか？」について、評定平均値は、年代では、70代が4.18と最も高く、最も低かったのは20代の3.14であった(表17)。年代が高くなるにしたがって、評定平均値も高くなる傾向がみられた。居住期間についても、30年以上が4.09と最も高く、5年未満が3.47と最も低い結果となり、居住期間が長いほど評定が高くなる結果となった。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた ($F(5,330)=3.16, p<.01, F(4,330)=4.52, p<.01$)。多重比較の結果、年代では、20代と、70代、60代、50代、40代の間、30代と、70代、60代、50代、40代の間で差異があり、居住期間では、30年以上とそれ以外の期間間で差異がみられた(表18)。

地域における人間関係の良好度に関しては、年代でみると、全年代で評定平均値3.0を上回っていた。全年代で、地域における人間関係は良好であると評定したことがわかるが、最も評定平均値が高い70代で4.18、最も低い20代で3.18と比較的大きな差があった。検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみら

れ、多重比較の結果、20代と70代間、20代と60代間、20代と50代間、20代と40代間、30代と70代間、30代と60代間、30代と50代間、30代と40代間で有意な差がみられた。これらのことから、20代30代といった若年者より40代以上の中高齢者のほうが、より地域における人間関係が良好であると感じてことがわかった。しかも、その差は大きく、20代では「どちらでもない」よりやや高いという評定であるが、40代では「やや良い」よりやや低いという評定に変わっていた。居住期間についても、全居住期間において評定平均値は3.0を上回っており、地域における人間関係は良好であると感じていることがわかる。検定の結果、居住期間の主効果に1%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間30年以上とそれ以外の期間間で有意な差がみられたことから、居住期間が30年以上になると、地域における人間関係の良好度は高くなるといえる。

表17 「人間関係良好度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

人間関係	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	3.06	3.17	3.29	3.06	0.00	3.14
30代	3.05	2.92	2.88	3.50	3.50	3.17
40代	3.50	3.75	3.87	4.07	4.20	3.88
50代	4.25	4.17	3.92	4.06	4.17	4.11
60代	3.50	3.67	4.13	4.43	4.32	4.01
70代	0.00	4.00	4.25	4.21	4.27	4.18
平均	3.47	3.61	3.72	3.89	4.09	

表18 「人間関係良好度」の分散分析表（年代 × 居住期間）

人間関係	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	18.18	5	3.64	3.16**
居住期間	20.78	4	5.19	4.52**
年代×居住期間	19.26	20	0.96	0.84
誤差	379.60	330	1.15	
		† $p<.10$	* $p<.05$	** $p<.01$

4.2.6. 生活環境の安全度

生活環境の安全に関する質問項目「あなたの生活環境は安全ですか？」につ

いては、評定平均値は、年代では、70代と60代が3.98と最も高く、最も低かったのは20代の3.45であった（表19）。年代が高くなるにしたがって、評定平均値も高くなる傾向がみられた。居住期間については、30年以上が3.97と最も高く、5年未満が3.54と最も低かった。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた（ $F(5,330)=3.08, p<.01$ 、 $F(4,330)=2.70, p<.05$ ）。多重比較の結果、年代では、人間関係の良好度と同様に、20代と、70代、60代、50代、40代の間、30代と、70代、60代、50代、40代の間で差異みられた（表20）。居住期間では、30年以上と、10年以上20年未満、5年未満間、20年以上30年未満と、5年未満間で差異がみられた。

表19 「安全度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

安全度	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	3.06	3.50	3.50	3.72	0.00	3.45
30代	3.57	3.85	3.75	3.70	3.25	3.62
40代	3.70	3.50	3.73	4.00	4.20	3.83
50代	3.88	3.83	4.00	3.81	3.89	3.88
60代	3.50	4.33	3.63	4.21	4.23	3.98
70代	0.00	4.00	3.63	4.00	4.30	3.98
平均	3.54	3.84	3.71	3.91	3.97	

表20 「安全度」の分散分析表（年代 × 居住期間）

安全度	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	20.87	5	4.17	3.08**
居住期間	14.64	4	3.67	2.70*
年代×居住期間	11.44	20	0.57	0.42
誤差	447.77	330	1.36	
† p<.10 * p<.05 ** p<.01				

生活環境の安全度に関する質問項目においては、全年代の評定平均値が、中庸値である3.0以上であり、全体的に生活環境の安全度は高いといえる。検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみられた。多重比較の結果、20代と40代間、20代と50代間、20代と60代間、20代と70代間、30代と40代間、30代と50

代間、30代と60代間、30代と70代間で有意な差がみられた。これらのことから、20代30代といった若年者より40代以上の中高年齢者のほうが、より生活環境が安全であると感じていることがわかった。居住期間については、全居住期間において、評定平均値は3.0を上回っていた。検定の結果、居住期間の主効果に5%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間30年以上と10年以上20年未満間、30年以上と5年未満間、20年以上30年未満と5年未満間で有意な差がみられた。居住期間が5年未満だと、生活環境の安全度の評価が低いといえる。しかし、評定平均値の差はわずかであり、生活環境の安全度は、居住期間が長くても短くても、全体的にはあまり大きな変化はないといえる。

4.2.7. 生活における幸福度

生活における幸福感に関する質問項目「あなたは、今の生活に幸福感を感じていますか？」については、評定平均値は、年代では、40代が3.98と最も高く、最も低かったのは20代の3.27であった（表21）。居住期間については、30年以上が4.37と最も高く、5年未満が3.32と最も低い結果となり、居住期間が長いほど評定が高くなった。

分散分析の結果、年代と居住期間の交互作用はみられず、年代、居住期間の主効果で有意な差がみられた（ $F(5,330)=6.04, p<.01, F(4,330)=3.35, p<.05$ ）。多重比較の結果、年代では、20代とそれ以外の年代間で差異みられた（表22）。居住期間では、5年未満とそれ以外の間、5年以上10年未満とそれ以外の間などで差異がみられた。

生活における幸福度に関する質問項目においては、全年代の評定平均値が、中庸値である3.0以上であり、全体的に、生活における幸福度の評価は高かったといえる。検定の結果、年代の主効果に1%の有意差がみられた。多重比較の結果、20代と30代間、20代と40代間、20代と50代間、20代と60代間、20代と70代間で有意な差がみられた。これらのことから、20代と30代以上で生活における幸福感に差があり、30代以上がより幸福感を感じているといえる。居住期間については、全居住期間において、評定平均値は3.0を上回っていた。居住期間が長くなるほど幸福度も高くなっているが、検定の結果、居住期間の主効果に5%の有意差がみられ、多重比較の結果、居住期間5年未満とそれ以外間、

5年以上10年未満とそれ以外間で有意な差がみられた。これらのことから、長く住めば住むほど、生活における幸福感が高いということがいえよう。

表21 「幸福度」評定平均値（年代 × 居住期間） n=360

幸福度	5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	30年以上	平均
20代	2.50	2.58	4.00	4.00	0.00	3.27
30代	3.57	3.62	4.00	4.30	4.25	3.95
40代	3.30	3.88	3.93	4.21	4.60	3.98
50代	4.25	3.50	3.42	4.31	4.33	3.96
60代	3.00	3.83	3.69	4.07	4.50	3.82
70代	0.00	4.00	3.50	3.84	4.17	3.88
平均	3.32	3.57	3.76	4.12	4.37	

表22 「幸福度」の分散分析表（年代 × 居住期間）

幸福度	平方和	自由度	平均平方	F 値
年代	42.15	5	8.43	6.04**
居住期間	18.73	4	4.68	3.35*
年代×居住期間	9.75	20	0.49	0.35
誤差	460.98	330	1.40	
		† $p<.10$	* $p<.05$	** $p<.01$

図1および図2は、主軸として用意した質問7項目の評定平均値をまとめたものである。年代による評定平均値では、生活満足度と地域における人間関係の良好度の評価にばらつきがあったことがわかる。とくに人間関係の良好度では、20代と30代、40代以上で分かれていたことがわかる。また、20代は全般的に評価が低めだったことも見てとれる。

居住期間による評定平均値も、波形が似ているが、行政満足度は3.0近辺に集中し、幸福度では評価にばらつきがあったことがわかる。ここでも20代は、全般的に評価が低めであったことがわかる。

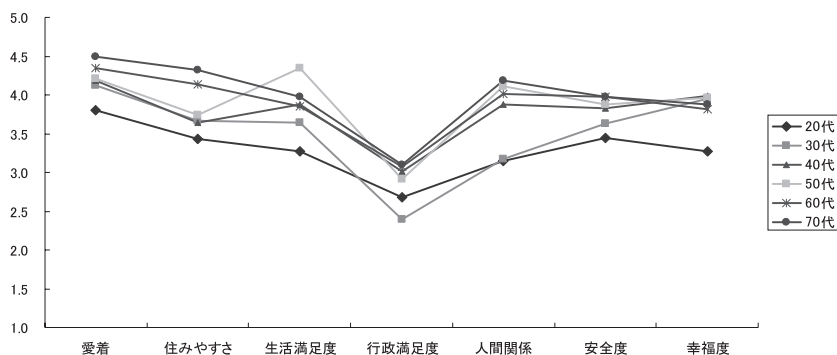


図1 評価平均値（年代）

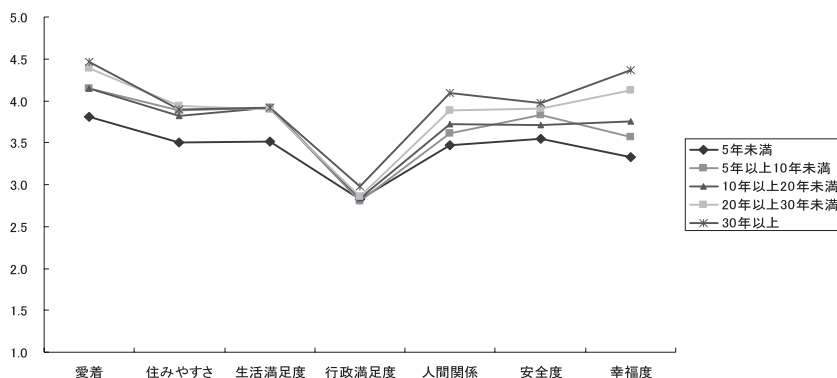


図2 評価平均値（居住期間）

4.3. 探索的因子分析

今回調査で用いた全質問項目（38項目）について、生活の安心感・満足感の因子構造を明らかにするため、探索的因子分析を行った。固有値の減衰状況を見ると、第1因子から第7因子にかけて9.21、4.87、3.66、2.53、1.44、1.18、1.07となった。固有値の減衰状況と解釈可能性から、因子数を4とし、主因子法で共通性を推定した。因子軸の回転ではプロマックス法を適用した。因子パターン

ンの値が各因子で0.40以上であった35項目を4因子の解釈の対象項目とした(表23)。表23内の網掛けは、各因子における因子パターン、主軸質問7項目がどの因子に所属しているのかを示している。

第1因子は、「あなたは、今の地域に満足しているところがありますか？」や「あなたは現在の街にずっと住みたいですか？」など15項目の因子負荷の値が高かった。項目内容から、地域に対する愛着や満足感を示す因子であると解釈できるため、『地域評価』因子とした。第2因子は、「あなたの街の交通の便はいいですか？」や「あなたの世帯は、自治会・町内会に加入していますか？」など7項目の因子負荷の値が高かった。項目内容から、行政サービスや利便性の評価を示す因子であると解釈できるため、『行政評価』因子とした。第3因子は、「環境問題について、何かしていますか？」や「地域活動や市民活動（ボランティアやNPO）に参加していますか？」など7項目の因子負荷の値が高かった。項目内容から、地域や住環境の改善・向上に対する意識を示す因子であると解釈し、『環境向上意識』因子とした。第4因子は「あなたは今の生活に満足していますか？」や「生活に生きがいを感じていますか？」など6項目の因子負荷の値が高かった。項目内容から、生活満足度やQOLの充実感を示す因子であると解釈できるため、『QOL』因子とした。

各因子について、それぞれの因子の尺度を構成し、信頼性係数（Cronbachの α 係数）を求めた。 α 係数は第1因子から順に0.892、0.841、0.818、0.763であり、得られた4因子については、それぞれ高い信頼性を確認することができた。

以上のことから、生活の安心感・満足感は、地域に対する評価、行政に対する評価、環境向上に対する意識、個人の内的な要素であるQOL（生活の質）の4つの要素から構成されていると考えられる。

『地域評価』因子、『行政評価』因子、『環境向上』因子、『QOL』因子それぞれの尺度得点の関係について相関行列を示す(表24)。『地域評価』因子と『環境向上』因子との間にはやや相関がみられ($r = .384$)、『環境向上』因子と『行政評価』因子との間にはかなりの相関がみられた($r = .627$)。一方、『地域評価』因子と『QOL』因子の因子間相関は $r = .091$ 、『行政評価』因子と『QOL』因子の因子間相関も $r = .056$ とどちらも低く、『地域評価』因子と『行政評価』因子、『QOL』因子はそれぞれ独立した因子であるといえる。白石・白石(2006)

表23 意識調査尺度の探索的因子分析結果（プロマックス回転・主因子法）

	地域評価	行政評価	環境向上	QOL	共通性
あなたは、今の地域に満足しているところはありますか？	0.89	0.34	0.30	0.12	0.54
あなたは、現在の街にずっと住みたいですか？	0.86	0.19	0.27	0.35	0.67
あなたは、今の地域に変わってほしいと思いますか？	0.81	0.21	0.19	0.03	0.66
あなたは、お住まいの地域がよくなるため、何かしたいと思いますか？	0.74	0.28	0.44	0.21	0.64
あなたは、お住まいの地域の景観に満足していますか？	0.67	0.36	0.42	0.09	0.58
あなたは、今の地域に不満や不安はありますか？	0.65	0.33	0.25	0.05	0.60
あなたは、あなたの街に愛着をもっていますか？	0.65	0.12	0.18	0.24	0.48
お住まいの地域での人間関係は良好ですか？	0.63	0.32	0.21	0.04	0.53
あなたは、今の地域に住んでいて幸福感はありますか？	0.63	0.34	0.21	0.42	0.55
あなたは、あなたの街は住みやすいと感じますか？	0.61	0.37	0.32	0.02	0.55
あなたの生活環境は安全ですか？	0.59	0.39	0.28	0.04	0.52
あなたは、今の地域に足りないところはありますか？	0.53	0.25	0.15	0.17	0.48
お住まいの地域の街並みなどの周辺環境、住宅の広さや採光・通風などの住環境に満足していますか？	0.51	0.23	0.35	0.27	0.37
あなたの街の空気はおいしく感じますか？	0.48	0.09	0.32	0.05	0.39
お住まいの地域をもっと住みやすくするために、地域の人々が集まって何か行動しようとしたら、協力しますか？	0.44	0.11	0.19	0.05	0.38
あなたの街の交通の便はいいですか？	0.28	0.84	0.35	0.01	0.65
あなたの世帯は、自治会・町内会に加入していますか？	0.18	0.80	0.22	0.06	0.74
周辺の市の体育館・プール等の体育施設や、高齢者福祉施設、図書館などの公共施設が利用できることを知っていますか？	0.20	0.73	0.19	0.05	0.57
災害の発生に備えての地域の防災対策について、不安を感じますか？	0.03	0.64	0.23	0.18	0.53
市政や町政が市民の意見や要望を反映していると思いますか？	0.13	0.49	0.06	0.21	0.44
市政や町政に関心がありますか？	0.25	0.45	0.12	0.14	0.32
市政や町政などの地域行政に満足していますか？	0.34	0.41	0.07	0.09	0.29
環境問題について、何かしていますか？	0.25	0.15	0.82	0.13	0.74
地域活動や市民活動（ボランティア、NPO）に参加していますか？	0.15	0.22	0.79	0.16	0.61
地球温暖化防止のため、何かしていますか？	0.20	0.05	0.61	0.04	0.57
地球温暖化を、あなたの地域で実感しますか？	0.18	0.21	0.54	0.01	0.50
環境問題について、あなたの地域で心配はありますか？	0.38	0.10	0.49	0.04	0.40
地球温暖化を防止するため、あなたができることはありますか？	0.11	0.18	0.47	0.09	0.42
環境問題について、あなたができることはありますか？	0.09	0.03	0.45	0.13	0.43
あなたは、今の生活に満足していますか？	0.49	0.43	0.34	0.79	0.70
生活に生きがいを感じていますか？	0.38	0.10	0.03	0.77	0.63
あなたは今の生活に幸福感を感じていますか？	0.22	0.25	0.10	0.70	0.53
日常生活の中での芸術・文化に触れる機会に満足していますか？	0.35	0.21	0.20	0.69	0.54
日常生活の中で、何らかのスポーツ、レクリエーション活動を楽しんでいますか？	0.12	0.17	0.05	0.64	0.57
生涯学習の環境づくりについて満足していますか？	0.30	0.12	0.31	0.43	0.46
「朝の目覚め」は快適ですか？	0.02	0.12	0.06	0.34	0.33
あなたは、最近1年間に生涯学習をしたことはありますか？	0.09	0.20	0.04	0.30	0.29
性別や障害の有無などを理由にした誤解や偏見があると感じたことがありますか？	0.27	0.28	0.11	0.22	0.19

表24 因子間相関

因子	行政評価	環境向上	QOL
地域評価	.248	.384	.091
行政評価	—	.627	.056
環境向上	—	—	.271

は、幸福感の要素として、個人の内的な要素、外的な（環境的）要素、生活の3つを示しているが、今回の因子間相関の結果と因子構造における各因子の質問項目を確認し、白石・白石の幸福感の要素に照らし合わせると、『地域評価』因子は、「地域」や「生活環境」などの質問項目が多いことから、生活あるいは外的な要素に、『行政評価』因子は、「利便性」や「行政」などの質問項目が多いことから、生活あるいは外的な要素に、『環境向上』因子は、「環境問題」に関する質問が多いことから、生活あるいは外的な要素に、『QOL』因子は、「生活」や「生きがい」といった質問項目が多いことから、生活あるいは内的な要素に対応している可能性もある。

今回は、生活の安心感や満足感を問う質問項目を用いて住民意識調査を行い、年代や居住期間といった、属性による意識の違いについて検討し、生活の安心感や満足感の心理的な構成要素を検討した。

今回は酒田市のみ調査の対象としたが、満足度の規定因については地域差があるとの報告もあること（國光，2010）から、他地域と比較し、地域差のある面と共通する面を検討していく必要もあるだろう。また、今回は尺度構成も行ったが、360人という調査協力者では尺度開発は不十分であり、安定したデータのためには、さらなる調査協力者を確保し追調査を行う必要と考えるが、今後の課題としたい。

参考文献

- [1] 有馬昌宏,「第3種の過誤」に陥らない住民参加のまちづくりの可能性,オペレーションズ・リサーチ, 54 (1), 12-18, 2009.
- [2] 遠藤恵子・佐藤幸子・三澤寿美・小松良子・片桐千鶴, 山形に住む母親の母親役割の受容と性役割感に対する意識, 山形保健医療研究, 6, 17-24, 2003.
- [3] Frey, B.S., and Alois, Stutzer., *Happiness and Economics*, Princeton, University Press, 2002.
- [4] 合津千香, 住民の地域福祉活動推進に必要な「地域力」とその要素 - 松本市笹賀地区の活動をとおして -, 松本短期大学紀要, 17, 43-56, 2008.
- [5] 市川虎彦, 住民参加と居住満足感 - 松山市余土地区意識調査より -, 松山大学論集, 20 (2), 71-95, 2008.
- [6] 今井範子・伊東理恵, 親子の居住形態からみた遠隔郊外居住の問題点 - 奈良県

- 榛原町における－，日本家政学会誌，57（11），761-774，2006.
- [7] Inglehart,R., Basanez,M., Moreno,A., *Human values and beliefs:a cross-cultural sourcebook:political, religious, sexual, and economic norms in 43 societies:findings from the 1990-1993 world values survey*, University of Michigan Press, 1998.
- [8] 猪口孝・田中明彦・園田茂人・Dadabaev,T., アジア・バロメーター躍動するアジアの信念と価値観，明石書店，2007.
- [9] 石川宏之・大原一興・小滝一正，地域資源に対する川崎市民の保全意識の形成に関する調査研究，日本建築学会技術報告集，10,203-208,2000.
- [10] 柏市，平成21年度市民意識調査，2010.
http://www.city.kashiwa.lg.jp/pr_ph/research/menu_rsc.htm
 (2010年9月1日閲覧)
- [11] 門間敏幸・安中誠司，住民参加に関する市町村職員の意識特性と規定要因－東北中山間地域を対象として－，農村計画学会誌，16（2），98-109，1997.
- [12] 包清博之・杉本正美，住民意識からみた生活環境に係わるオープンスペース及び関連空間の系統化に関する研究，ランドスケープ研究，58（5），221-224，1995.
- [13] 警察庁，子どもを犯罪から守るための環境づくり支援モデル事業に係る調査研究等報告書，警察庁，2010.
- [14] 金美英・日比野治雄・小山慎一・李震鎬，韓国・釜山広域市における都市景観の色彩に関する住民意識調査，デザイン学研究，55（3），73-80，2008.
- [15] 幸田町，平成21年度住民意識調査，2010.
<http://www.town.kota.lg.jp/index.cfm/15,0,114,html>
 (2010年9月1日閲覧)
- [16] 小島隆矢・若林直子・眞方山美穂・樋野公宏・布田健，住居・地域の安全・安心についての意識と対策行動に関する統計的因果分析，総合論文誌，7，104-109，2009.
- [17] 工藤匠・阿部晃士，環境配慮行動とその規定因の類型－「滝沢村環境基本計画策定に関する住民意識調査」の計量分析－，総合政策，5（3），429-444，2004.
- [18] 國光洋二，住民生活満足度の地域間格差に影響する要因－山形と山口の市町村データによる共分散構造分析－，地域学研究，40（1），129-141，2010.
- [19] 栗原伸一・霜浦森平，財政構造に関する住民意識の都市農村比較，千葉学園学報，59，47-57，2005.
- [20] 畔柳昭雄・大隈健五，離島住民の生活環境に対する意識に関する研究－福岡県大島村における自由連想法を用いた意識調査－，日本建築学会計画系論文集，491，255-262，1997.
- [21] 前田展弘，幸福度指標開発に向けた期待，ニッセイ基礎研究所Report，2010年8月号，2-3.
- [22] 増田樹郎，離島における福祉課題－対馬の住民生活意識調査をととして－，地

- 域総研所報, 3, 33-44, 1996.
- [23] 松本幸正・伊藤裕晃・松居寛, 豊田市における市民意識調査を用いた生活環境に対する住民意識と改善要因の定量的分析, 都市計画論文集, 38 (3), 73-78, 2003.
- [24] 宮沢俊郎, 日本経済と地域間格差のマクロ分析, 岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要, 19 (1), 11-25, 2008.
- [25] 内閣府, 平成22年度年次経済財政報告, 2010.
<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je10/10.html>
 (2010年9月1日閲覧)
- [26] 内閣府経済社会システム, 平成21年度国民生活選好度調査, 2010.
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html>
 (2010年9月1日閲覧)
- [27] 日経リサーチ, 地域ブランド戦略サーベイ2006, 日経リサーチ, 2006.
- [28] 農林水産省, 平成20年度都道府県別食料自給率について, 2009.
http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/zikyu_10.html
 (2010年9月1日閲覧)
- [29] 大橋照枝, プータンのGNH (Gross National Happiness: 国民総幸福) の算出手法とHSM (Human Satisfaction Measure: 人間満足度尺度) のVer.6の開発, 環境経済・政策学会2010年大会要旨集, 2010.
- [30] 近江隆・赤木美苗・伏見沙和子, 地域別ネットワーク居住実態の調査分析の枠組み－仙台市を事例として－, 日本建築学会計画系論文集, 566, 119-125, 2003.
- [31] 近江隆・赤木美苗・鈴木洋伸・佐々木美紀, ネットワーク居住における親族的広がりの地域性－東北地方を事例として－, 日本建築学会計画系論文集, 594, 139-146, 2005.
- [32] 酒田市ホームページ総務部情報管理課統計係.
<http://www.city.sakata.lg.jp/ou/somu/joho/tokei/>
 (2010年9月1日閲覧)
- [33] 佐古井貞行, 離島住民の生活意識, 愛知教育大学研究報告, 45 (人文・社会科学編), 153-162, 1996.
- [34] (財) 社会安全研究財団, 犯罪に対する不安感等に関する調査研究, (財) 社会安全研究財団調査研究事業報告書, 2005.
- [35] 白石賢・白石小百合, 幸福度研究の現状と課題－少子化との関連において－, ESRI Discussion Paper Series 165, 2006.
- [36] 園部真美・恵美須文枝・高橋弘子・鈴木享子・谷口千絵・水野千奈津・岡田由香, 地域住民のボランティア活動に対する意識の実態, 日本保健科学学会誌, 10 (4), 233-240, 2008.
- [37] 寺崎正治・網島啓司・西村智代, 主観的幸福感の構造, 川崎医療福祉学会誌,

9 (1), 43-48, 1999.

[38] 所沢市, 平成21年度市民意識調査, 2010.

<http://www.city.tokorozawa.saitama.jp/shiseijoho/keikaku/shiminishiki/>

(2010年9月1日閲覧)

[39] 渡邊勉, 地域に対する肯定観の規定因－愛着度、住みやすさ、地域イメージに関する分析－, 地域ブランド研究, 2, 99-130, 2006.

[40] 山形県, 平成21年度新世紀やまがた課題調査報告書, 2010.

[41] 山形県庄内総合支庁, 庄内の経済動向第88号 (平成22年6月), 2010.

謝辞

快く調査に回答くださった酒田市民の方々に、衷心より感謝いたします。

本稿は、2010年日本地域会議シンポジウムにおいて発表したものを、一部加筆したものである。